



前号で触れたように、昨年は世界的名作『ドン・キホーテ』刊行400年にあたり、新訳書や研究書が出版された。では作者のセルバンテスに関する出版はどうであっただろうか。

昨年は『ドン・キホーテ』のことしか頭にはなく、そんな中で著者から『セルバンテスの芸術』が送られてきて、大いに驚きまた大いに喜んだ。驚いたのは、著者には一昨年、セルバンテス研究の決定版とされるアメリカ・カストロの名著『セルバンテスの思想』の翻訳を出されたばかりであったからであり、また喜んだのは記念の年に『ドン・キホーテ』研究を含むセルバンテス研究を出されたからである。

日本でこれまでに出版された「セルバンテスの本」の数は決して多くはない。会田由・牛島信明『ドン・キホーテとセルバンテス』さ・え・ら書房、1971 カルロス・フェンテス（牛島信明訳）『セルバンテスまたは読みの批判』水声社、1991 山田由美子『ベン・ジョンソンとセルバンテス』世界思想社、1995 P. E. ラッセル（田島伸悟訳）『セルバンテス』教文館、1996 坂東省次・蔵本邦夫編『セルバンテスの世界』世界思想社、1997 ジャン・カナヴァッジオ（円子千代訳）『セルバンテス』法政大学出版局、2000 アメリコ・カストロ（本田誠二訳）『セルバンテスの思想』法政大学出版局、2004

これらの中でまず注目すべきは、カナヴァッジオ著『セルバンテス』の翻訳出版であろう。これは一昨年初来日されて本学でセルバンテスについて講演をされたパリ大学教授カナヴァッジオ氏の名著であるが、同教授はセルバンテス研究では世界的権威の一人であり、同書の出版によってセルバンテスの生涯の全貌がほぼ明らかになったといえよう。

しかし、それ以上に、『セルバンテスの思想』の翻訳出版は待望の書であった。本書刊行の

1929年以前と以後ではセルバンテス像はおおきく塗り替えられたと言われるほど、本書の刊行は、世界のセルバンテス研究者にとって衝撃的な一冊であったのである。

日本におけるセルバンテス研究は明治時代に遡るが、その研究の中心は『ドン・キホーテ』などの作品論であり、本格的なセルバンテス研究となると翻訳が中心であった。そんな状況の中で、日本人初の本格的なセルバンテス研究『セルバンテスの芸術』が記念すべき年に刊行されたことはなんととも喜ばしいことである。本書は序論「対立の時代とセルバンテス」と結論「多忙な読者へー結論にかえて」の間に8章がおかれている。414ページからなる大部の本であるが、文章はこなれていて読みやすいのも本書の特徴の一つであろう。中世スペインには、キリスト教徒、イスラム教徒そしてユダヤ教徒の共生の時代があったことはよく知られているが、15世紀後半からスペインがカトリック統一国家に向かう中で、内なる異教徒であったイスラム教徒とユダヤ教徒との間に対立の時代が始まった。セルバンテスはまさにこの対立の時代を生きた人であった。

『ドン・キホーテ』は「対話の書」とも言われるが、著者はセルバンテスのすべての作品の分析を通じて、「対話」に注目している。セルバンテス是对立の時代において真の人間の融和と共存の道を探ろうと試みた。それは人間が対話を通して共通理解に達するための方法の模索であったのだ。本学のモットーは、「言語による世界平和」であるが、セルバンテスは今から400年前に、「対話」すなわち言葉による平和の道を考えていたのである。推測の域を出ないが、筆者は言語による平和の思想のルーツをエラスムスの思想にあると見ており、その意味でエラスムスの影響を受けたと言われるセルバンテスの思想に同じ考えがあっても不思議ではなからう。

『ドン・キホーテ』を中心に展開されるセルバンテスの思想は、21世紀を迎えた人類の将来にきわめて重要な意味を持つものといえよう。

ばんどう しょうじ（教授・スペイン語学）